2013筑波大学附属駒場論集53集

読書指導の意義と可能性

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
有木　大輔・澤田　英輔・関口　隆一
杉村千亜希・千野　浩一・東城　徳幸
平田　知之

読書指導の意義と可能性

筑波大学附属駒場中・高等学校　国語科
有木　大輔・澤田　英輔・関口　隆一
杉村千亜希・千野　浩一・東城　徳幸
平田　知之

要約

本プロジェクトでは、「学習者の発達段階に応じた読書指導のあり方」、「学習者がテーマを設定し読むべき書籍を選定する段階における助言や指導のあり方」、および「古典作品を読書の対象と捉えさせるための条件や指導のあり方」について検討した。特に中学段階における調べ読みでは、テーマを決定するまでに漠然と資料を読みふける段階を重視し、教員が教え込むのではなく、生徒が自分からテーマを見つけ出す形になるよう助言のしかたを工夫した。次のステップでは、目的に適した資料を選ぶということを、体験的に理解させることに留意した。また、古典に親しむ態度を養うために、作品を読解することのみに腐心せず、さまざまな古典作品を参考資料と位置づけ、古典を材料として使う、というような授業を実践した。

キーワード：読書　調べ読み　図書館　古典嫌い　学習指導要領

1　プロジェクトの基本方針

1.1　本校生徒の読書傾向

本校生徒の読書傾向について、やや古い調査になるが、２００４年度第４６回全附連高校部会金沢大会国語分科会における本校国語科関口隆一の発表に基づいてまとめると、以下のとおりになる。

まず、「一ヶ月に平均何冊程度本を読んだか（雑誌を除く）」という質問に対して、中１から高３を通じて「１～２冊」と答える層が最も多く、割合も４割を超える。「０冊」とする生徒は中２・中３で減るが、高校では学年が上がるごとに増え、高３では２割を超える。「３～５冊」は逆に学年が上がるごとに下がり、中１で３６％だったのが高３で１６％まで落ち込む。「６～１０冊」「１０冊以上」の層はほぼ一定しているが、「１０冊以上」が高３でやや高くなっている。全体としては、中２・中３でやや平均冊数が増え、高１で減るという傾向が看取される。

	中1	中1%	中2	中2%	中3	中3%	高1	高1%	高2	高2%	高3	高3%
[1] 0冊	8	6.7	2	1.7	4	3.3	16	10	19	13	34	22
[2] 1～2冊	55	46	48	40	61	50	87	57	71	48	68	44
[3] 3～5冊	43	36	43	36	33	27	36	24	31	21	24	16
[4] 6～10冊	8	6.7	18	15	9	7.4	6	3.9	17	11	9	5.9
[5] 10冊以上	4	3.3	4	3.3	9	7.4	6	3.9	7	4.7	15	9.8

次に、「本を読もうとするきっかけは何が多いか」（複数回答可）との質問に対しては、「書店で見かけて」とする回答が圧倒的に多く、生徒数を母数とした割合では、６カ年を通じて６６～８０％の間にある。それを除くと、「広告を見て」「マスコミで取り上げられて」とする回答が、合計で４割から５割である。書店で選ぶという回答には、当然ながら広告やマスコミで取り上げられていることをきっかけとする者が含まれるはずであるが、要するに、親・友人・学校に薦められて選ぶのではなく、主体的に本を選んでいるという意識の表れであると考えられる。なお、「学校で薦められて」を選ぶ者は、中２の２０％をピークに、学年が上がるについてれ減り、高３で５％にまで落ち込んでいる。関口の調査は、以下、読書の対象としての雑誌や漫画、あるいは読書とＳＳＨとの関連にまで及んでいるが、ここでは割愛する。

	中1	中1%	中2	中2%	中3	中3%	高1	高1%	高2	高2%	高3	高3%
[1] 書店で見かけて	79	66	93	78	86	71	122	80	109	73	115	75
[2] 父から薦められて	17	14	14	12	17	14	16	10	15	10	12	7.8
[3] 母から薦められて	21	18	16	13	19	16	16	10	14	9.4	9	5.9
[4] 兄弟から薦められて	5	4.2	2	1.7	4	3.3	6	3.9	7	4.7	5	3.3
[5] 友人から薦められて	11	9.2	25	21	19	16	16	10	20	13	23	15
[6] 学校で薦められて	22	18	24	20	19	16	19	12	9	6	7	4.6
[7] 広告を見て	34	28	30	25	29	24	44	29	30	20	39	25
[8] マスコミで取り上げられて	20	17	26	22	23	19	34	22	27	18	27	18

The significance and possibility of reading guidance

1.2　基本方針

以上をまとめると、中２から中３にかけて読書への意欲が増していることが窺え、教員による働きかけが一応奏功していると予測されるのが、中１から中２にかけてであるということが浮かび上がる。

このような状況を踏まえて、今年度のプロジェクトでは、以下の点に留意した。まず、中高６年間をとおして、学習者の発達段階に応じた読書指導のあり方とはいかなるものであるか、という視点を意識しつつ授業をおこなった。特に中学生に対しては、単に読書冊数を増やすというのではなく、１２年度以前のプロジェクトでも留意されてきたインベンション指導の重要性に鑑み、学習者がテーマを設定し読むべき書籍を選定する段階において、いかなる助言が可能であるかという視点を意識した。これは、本校の中１から中３にかけておこなわれる総合学習やさまざまな教科におけるレポート作成に際して、テーマを設定した後の指導に重きが置かれる傾向にある中で、テーマを設定するまでの過程に指導者がより関与する余地があるのではないかとの見通しに基づく。その際、国語科における学習指導であるという面を重視して、指導者は、それぞれの局面において何を学ばせるかという具体的な指導目標を明確にするように努めた。また、読書指導における古典の位置づけにも目を向けた。学習者が古典を学習の対象としてだけでなく、読書の対象と捉え、古典に親しむようになるためには、どのような指導が有効であるか、あるいはどのような条件が必要であるか、という観点からも検討を加えた。

2　実践報告

2.1　各実践の概要

今年度、本校国語科教員が行った主な実践概要は次の通りである。

学年（教員名）	実践テーマ
実践内容の概要	

中学

中２国語（杉村）	書籍を用いた調べ学習―自主的な読書のきっかけ作り―
・単元「木曽義仲の最期」の導入として実施。４人１組のグループ学習。１時限目は調査・資料作り、２～３時限目はグループ発表。 ・『平家物語』と木曽義仲について、図書館の資料を用いて調べ、グループごとにプリントにまとめる。 ・生徒自身が自由に書籍に触れられるよう、あえて参考図書などは提示せず、様々な分野の書架を歩き回ってみるよう指示を出した。また、必ず複数の資料を併用すること、出典を明記することを指示した。 ・「本に触れて、自ら欲しい情報を得る」という目標を設定したため、インターネットの使用は不可とした。 ・多くの生徒が熱心に図書館のあちこちに本を積みあげ、読み較べていた。日ごろ図書館に来ない生徒や、あまり本を読まない生徒も本に親しむ機会になったようである。調査を忘れて普段の読書のようになっている生徒も見受けられたが、自主的な読書の萌芽ととらえ容認した。 ・〈資料の取り合い〉が、ある種良い作用をもたらしたようで、文学や歴史の書架以外からも資料を探そうとする生徒が見られた。 ・グループ発表では、同じテーマでの調査にも着眼点やまとめ方に個々の違いが出ることが浮き彫りになり、効果的なフィードバックになった。	

中３国語（関口）	外国小説と翻訳
定番教材『故郷』は、竹内好訳のものが教科書に掲載されるのが通例である。これを、古い翻訳で手に入りやすい青空文庫版（井上紅梅訳）と比較した。井上紅梅訳は戦前の魯迅全集のもので、現在では古めかしいものの当時としては定評のあったものと考えられる。 注目すべき点として、竹内訳では原文通り「猹」（チャー）が用いられているのに対し、井上は「土竜（もぐら）」と訳語を当てている。この点について、作品の読解に与える影響を考えた。 現在、翻訳作品は国語の教材として積極的に取りあつかわれることが少ないため、今回の試みを通して翻訳や言葉への関心を深めてもらえていればありがたいと思う。	

中３国語（千野）	古典文学作品の演劇化
古典文学作品のある一場面を切り取り、脚本化する過程で、原文には直接書かれていない、登場人物の表情やしぐさ、心の動きを、現実の人間のものとしてどのように表現しうるかを考え、実際に演じてみる、という授業である。１グループ６～７名として、各クラス７グループで作業をさせた。 古典の読解だけでなく、古典の読書指導も兼ねる。作品の選定は生徒自身に任せて、図書館を活用させた。現代語訳のある全集類を図書館に集め、梗概書や小説	

の類、古典を扱った漫画も自由に読ませた。作品と演じる場面が決まった後は、その場面の詳細な情報を収集する作業を課す。そうした調査に基づいて、台本を書き、1グループ数分程度で演じ、互いに評価し合う。

高校

高２（有木）	漢詩実作と専門書入手の方法
高校２年生では漢詩の鑑賞と共に漢詩の作成を行った。作詩には様々な決まり事があり、それを授業で伝えても全てを理解するのは難しい。そこで夏休みに作詩の課題を出し、自分で作詩のルールを学ぶ期間を与えた。漢詩作成のためのルールが記された書物は少なく、各漢詩連盟が作成したペーパーバックが最も有用である。これらの書はあまり普及していないため、大型書店やアマゾン等では入手できない。そこで神田の専門書店を廻り、「足で書物を探す」経験をさせた。	

その他

主に高校（澤田）	読書会
授業ではないが、主に高校生（希望者）を対象として、英語科教諭とともに読書会をおこなった。同じ本を読み、事前に感想や分析などを提出させる。その資料を参考として配布した上で、３班に分かれて意見交換をする。途中でメンバーを入れ替え、前の班で議論されていたテーマについて、別のメンバーが議論を引き継ぐという、いわゆるワールドカフェ形式を採用した。	

2.2　まとめ

本プロジェクトで課題とする、「中高６年間における学習者の発達段階に応じた読書指導のあり方」、「学習者がテーマを設定し読むべき書籍を選定する段階における助言や指導のあり方」、および「古典作品を読書の対象と捉えさせるための条件や指導のあり方」という観点から、今年度の実践を補足する。

2.2.1　調べ学習における二つの段階

杉村・千野の授業に共通する点であるが、資料を探すという作業には、二つの段階が用意されている。第一に、何を調べるかということを決めるのを目的として漠然と資料に触れる段階があり、次に、調べる内容が決まり、その目的に適した資料を探す段階がある。二人の実践においては、特に第一の段階を通常よりも重視しているのが特徴的であろう。千野の授業では、作品・場面決定に至るまでに、１人平均３～５冊程度は目をとおしていたようである。その後、各自の情報を持ち寄って、班で話し合いがもたれ、作品・場面の決定がなされる。図書館・教室間の移動は自由としたが、ほぼ全員が、私語もせずに黙々と本を読みふける姿が見られた。

この段階においては、自己決定のプロセスが尊重されるべきであり、何かを教え込むような指導よりも、いわばコーチング的手法によって、生徒自身の中にある漠然とした思いやイメージを、指導者が明確化したり、焦点化したりしながら、目標の設定に導くことが有効であろう。

また、このような調べ学習において、特に上述したような第一・第二の段階は、ともすれば区切りのない一連の作業として括られてしまうことが多いが、段階ごとに明確に学習目標を設定し、その目標ごとに時間を区切り、指示を変えながら作業にあたらせることが有効である。

学年が上がると、第二の段階である、目的を意識して適切な本を選ぶことに、指導の重心が移ってくる。同じく中３を対象とするが、関口の授業では、竹内訳に原文の「猹」（チャー）が用いられているのに対し、井上は「土竜（もぐら）」と訳語を当てている点に注目させ、主人公が大人になった時、動物としての「もぐら」を知らないとするのは常識的に見て適切ではないと考えられることから、井上訳では原作で表そうとしていた主人公の思考、心情がうまく読み取れなくなることを確認した。読書指導という観点では、翻訳を読むにあたり、どの翻訳を用いるかによって解釈のかなり重要な部分に違いが生じる可能性があることを示し、翻訳を読み扱う際の基本的なリテラシーを学ばせた。特に、翻訳を基礎資料として発表などで用いる際は、どの翻訳を用いるかによって、一つの立場を表明していることになることにも意識を向けさせた。

千野の授業では、岩波日本古典文学大系、同新日本古典文学大系、新潮日本古典集成、小学館日本古典文学全集、同新編日本古典文学全集、同完訳日本の古典、講談社学術文庫、角川ソフィア文庫、同ビギナーズクラシックス、岩波文庫などの全集・注釈書の類と、古典を小説化したものや梗概書・入門書の類、さらに、古典を扱った漫画を多数用意し、最初にそれぞれ用途が異なることを認識させた。演じる作品を決定した後は、全集や注釈書を積極的に活用して、複数の資料が同一箇所をどのように解釈しているかを詳細に比較し、違いを見つけるように指示した。

有木の授業は、関心の高い学習者向けであり、専門性の高い内容である。漢詩実作自体は、しばしば授業のテーマとして取り上げられることであり、それを全生徒共通の目標として掲げつつ、さらに、意欲の高い者に対して、より専門的な課題を与えた形になる。基礎資料とも言えるものが、ときに専門の古書店によらなければ入手できないということを、経験的に理解させることを目標とした実践である。今回はフォローすることができなかったが、神田や早稲田の古書店街や、東京古書会館における古書即売展などに生徒を引率することも、意欲のある中・高校生には有意義であろう。

澤田の読書会は、希望者を対象としたものであり、授業ではないが、昨年度から継続的に実施され好評を博している。同じ本を読んで感想を共有したり、意見を交換したりするといった、読書会ならではの楽しさがあり、多くの生徒が自発的かつ意欲を持って参加している。人数が多くなっても対応が可能な、ワールドカフェ形式を採用しているが、その運営に本校卒業生が協力している点に特徴がある。クラスや学年の枠を越えるというだけでなく、大学生であるＯＢがそこに加わることによって、教員ではない大人の視点に触れることができる。これは生徒にとって非常に刺激的な経験であり、読書会を活気づかせる仕組みである。光文社古典新訳文庫のサイトにも紹介されているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

（『すばらしい新世界』を読もう！ 筑波大附属駒場高校「ぶらり読書会」見学レポート《読書会の進め方編》
http://www.kotensinyaku.jp/archives/2013/08/006269.html
同《議論編》
http://www.kotensinyaku.jp/archives/2013/08/006270.html ）

2.2.2 古典作品を中高生の読書の対象とするために

先の学習指導要領改訂の基本方針として、中央教育審議会の答申で「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成が教育現場に求められた。古典が、学習の対象としてだけではなく、生涯にわたって親しむ対象となるためには、中等教育における古典の授業のあり方が、本格的に見直されなければならないと思われる。というのも、国立教育政策研究所教育課程研究センターが実施した平成十七年度高等学校教育課程実施状況調査によれば、古文・漢文を好きではない生徒の割合は７０％を超えており、英語や数学が好きではない生徒の割合を大幅に上回っている。国語教育の現場を担う者としては、こうした状況に手をこまねいているわけにはいかず、古典に親しむ態度の育成を喫緊の課題と捉えている。

このような問題意識から、本プロジェクトでは、読書指導の文脈の中に古典をいかに位置づけることができるかという問題にも取り組んだ。古典を原文のままで、中高生の読書の対象にすることは無理があると予測されるため、忸怩たる思いがないわけではないが本校図書館に古典を扱う漫画を大量に配架してもらった。まだ数値化するに至っていないが、貸し出しはかなり多いようであり、本校図書館司書によれば、貸し出した漫画が戻ってこないことが「嬉しい頭痛の種」であるとのことである。特に中学生の貸し出しが多いらしい。また、書籍についても貸し出しが一定数あり、特に、新潮日本古典集成と角川ソフィア文庫の貸し出しが好調であるとのことである。角川ソフィア文庫は言うまでもなく文庫本であり、新潮日本古典集成は全集でありながらハードカバーの単行本と同じサイズで、携帯に便利であることが、貸し出しが多い理由なのではないかと推量される。生徒は必ずしも漫画のような気楽なものばかりを追求しているわけではないようである。

千野の授業では、中学においては古典を読解することのみを目的とせず、むしろ、読解とは別の目標を掲げて、それを達成する過程で古典を材料として用いる、という形をとるように工夫している。古典の一場面を演劇化するということを試みたのは、そうした意図による。対象となった中３生徒は、昨年度も「詠史句を作る」という課題で、読解以外を目的として古典を資料として用いる学習を経験しており、今回で２度目となる。古典や歴史を客観的・俯瞰的に捉えるのではなく、その場に遭遇している登場人物の視点から古典の中で起こっている事態を見つめ、句に詠んで、解説を加えるという課題である。生徒（当時中２）の作品を以下に２点紹介したい。

そこ抜けた五右衛門風呂に夏の虫
解説　『東海道中膝栗毛』に拠る。旅に出た弥次と北八は道中さまざまな問題を引き起こしていく。その二人が酒匂川を渡り小田原の宿へとやってきた際、五右衛門風呂の入り方を知らず、誤って下駄をはいて入ってしまったため、底を踏み抜き弁償することとなった。このように入り方を知らず、自らに災いをもたらした二人を「飛んで火に入る夏の虫」に喩えた。

草刈の手より落ちゆく美人草
解説　謡曲「項羽」に拠る。(中略) 妃の虞氏は孤独に耐えきれず、項羽を求め高楼から身を投げ落ちゆく。この虞氏の葬られた塚からひなげしの花が咲いたという。時は変わる。同じく烏江にて小萩原から秋には少ないひなげしなど様々な花を草刈の男がとる。帰りにいつもはとられない船賃をとられるが、その船賃は一本の花でいいという。求められた花はひなげしであり、実は船頭は項羽の扮した姿であった。草刈の手によって、時を超え求めあっていた二人が結ばれた。が、それは美人草であって虞氏には届かない。項羽を求め身を投げた虞氏の気持ちは儚く散りゆくのであろうか。
(＊字数の都合上、途中を略した)

この２作品を紹介したのは、句の巧みさもあるが、おそらく通常の古典の授業では中高を通じてめったに扱われない『東海道中膝栗毛』と謡曲を取り上げており、このことが古典学習において今まで見過ごされてきた重要な問題を示唆しているかに思われるからである。一つは、江戸時代の、笑いを主眼とした戯作が中等教育からほぼ完全に抜け落ちてしまっているという問題である。むろん、江戸の戯作は地口を含んでいたり、知識階級を対象とした難解な洒落を含んでいたりで、扱いにくいこともあるが、古典に親しむという目的に照らして、古典を庶民レベルで最も享受したであろう、この時期の人々とその作品に目を向けないのは、非常にもったいないと言える。江戸の戯作は教員の工夫次第で、「古典に親しむ」という目標の達成に非常に有効であると考える。

そして、謡曲であるが、高校の教科書教材として『風姿花伝』は採られるにしても、謡曲のテキストをそのまま教材とすることは、教科書以外の自主教材であってもあまり聞かない。しかしながら、謡曲ほど江戸時代の人々に愛好され親しまれた〈古典〉はないとさえ言えるのであり、古典について語る上で謡曲に言及しないということは、古典の時代の常識に照らせば考えられないことと言えよう。古典の世界では、謡曲に限らず様々な〈古典〉がまぎれもなく親しむべき対象として存在してきた。古典の中に見出される〈古典〉享受のありようは、現代において育成を期待される古典に親しむ態度のモデルとしてもっと見直されてよい。

このように見てくると、中等教育における古典学習では、かならずしも正確な読解にのみ力を注ぐのではなく、気軽に古典の本を手にとって、楽しむことができるような環境を整えることがまずは強く意識されねばならないだろう。残念ながら古典は、たとえばブックトーク・読書会・ビブリオバトルといった読書に関する様々な実践の文脈からほとんど疎外されているのが現状である。こうした状況を打開するためには、古典を難解なイメージから解放しなければならず、その一つの方法として、古典を中高生の読書の対象とするような実践が意味を持つのである。

一方で、学習者が古典の原文を独力で読み、かつ楽しめる書籍が増えることも待たれる。また、高大だけでなく中学と大学との連携をもはかり、自然科学分野におけるインタープリターのような人材を、古典研究の分野において養成することも有効であろう。古典研究における最先端の刺激的な成果を、教育の場において積極的に活用することが、古典嫌いを減らす上で有効であると考える。

2.2.3　今後の課題

発達段階に応じた読書指導のあり方という問題について、今年度のプロジェクトでは、高校での実践例が不足している。ただしこれは、高学年になるにつれて、読書指導が情報処理技能の指導や論理的に思考する訓練の中に吸収されてしまうからであり、実践がないわけではない。言い換えれば、読書指導という語義の定義を曖昧にしたままに、プロジェクトを進めてきてしまったという反省がある。情報処理技能や論理的に思考する技能の習得については、ＳＳＨの一環として本プロジェクトとは別に取り組みがなされており、それらと重ならないようにテーマをより限定するべきであった。

また、古典に親しむ態度の育成という目的がどの程度達成されたかということについて、客観的な数字を提示することができなかった。漫画だけでなく、本格的な全集も貸し出しが増えているとの報告を図書館司書からいただいたが、どの学年でどの程度貸し出しが増えているのかなど、詳細なデータを提示できなかった。これらについては、別稿を期したい。

【参考文献】

１.輿水実(1971)『講座　国語科基本的技能の指導　４　読書技能』明治図書出版
２.増田信一(1997)『読書教育実践史研究』学芸図書